

海外管外調査報告書

令和7年4月18日～21日



神戸市会 台湾訪問議員団

神戸市会台湾訪問議員団の海外視察報告書

令和7年8月1日

神戸市会台湾訪問議員団団長 平井真千子

しらくに高太郎

植中雅子

上畠寛弘

浅井美佳

(以上、自由民主党神戸市会議員団・無所属の会)

高橋としえ

住本かずのり

外海開三

(以上、日本維新の会神戸市会議員団)

村上立真

(以上、無所属)

今年4月18日から神戸空港で国際チャーター便の就航が始まり、桃園（台北）・神戸間の第一便がスターラックス航空便となることから、坊神戸市会議長とともにこの便で台湾を訪問して就航記念行事に参加するとともに、この機会に桃園市、台北市並びに新北市を訪問して神戸市との友好交流の促進に関して意見交換を行うとともに、台湾各地の観光コンテンツ等についても視察し、新たに知見を深めて21日に帰国したところ、本訪問団の海外管外調査報告書を以下の通り提出する。

第一部 台湾訪問議員団の視察報告

1. 桃園市訪問（18日）

(1) 桃園市歓迎セレモニー（13：30）

【出席者】桃園市議会議員、新北市議会議員、桃園市副市長はじめ行政関係者
桃園協議公司（空港の運営会社）の副総裁はじめ桃園空港関係者

桃園空港に到着後、空港ロビーにおいて歓迎セレモニーが行われた。セレモニーの冒頭では神戸と桃園のこれまでの交流の経緯が紹介された。神戸市側はこれまで石門ダムの一歩マラソンや、2024年の桃園ランタンフェスティバル、海線地域のイベントに参加。桃園市側は神戸マラソンや、海外の都市としては初めてルミナリエに出展するなどの観光都

市としての交流が行われてきた。今年2月に開催された2025台湾ランタンフェスティバル（会場は桃園）に神戸市議会議長と観光局が参加したことに触れ、形式的な往来にとどまらず、互いの信頼と友情を積み重ねるものとなっていると強調された。また、ヴィッセル神戸を運営する楽天グループが、桃園ではプロ野球チームの楽天モンキーズ（楽天桃園）を運営しているという繋がりも紹介され、「楽天ガールズ」によるパフォーマンスが行われた。

続いて桃園市を代表して王明鉅副市長がご挨拶された。

「これまでも神戸との交流を重ねてきたが、関西国際空港を利用するルートでした。今回が、神戸空港から桃園空港への“初の直行便”での交流という歴史的な瞬間に立ち会っています。この歴史的な出来事を実現させるためにご尽力くださった議長ならびにすべての議員の皆さまに、心より感謝申し上げます。

昨年、日本から台湾・桃園空港への来訪者数は130万人。台湾から海外へ出国する人は年間でおおよそ535万人、3人に1人が日本を訪れている計算になります。私も535万人のうちの一人で、神戸では北野の異人館街が一番好きです。

これまで築いてきたスポーツ・マラソン交流、観光交流、そして教育における修学旅行の交流に加えて、今後は文化や博物館に関する交流も、私たち両都市にとって重要な柱となることでしょう。

神戸と共に歩むこの直行便、スターラックス航空、エバー航空の路線が開通したことにより、桃園を訪れる観光客は今後ますます増えていくことを確信しています。私達にとって、関西空港はとても大きな空港で、入国・出国にとても時間がかかります。もし北野の異人館へ行こうとした場合、関西空港を経由して乗り継ぐと、最低でも3時間はかかると思います。しかし神戸空港を利用すれば、ポートライナーで三宮駅まで直通、たったの8駅・18分で到着します。」と神戸への親愛の情のこもったスピーチをされ、自らが描いた北野の異人館の絵葉書を記念品として坊議長に贈呈された。

続いて坊やすなが議長より「議長として台湾、桃園を訪問するのは3度目で、神戸市議会の歴史上、同じ国、同じ都市を3度訪問するということはなかったと思う。今回の国際チャーター便就航で、週5往復が神戸と桃園空港を発着することになります。これが太い両市のパイプとなり、お互いの強みを活かし助けあう、そういった関係にしていきたい。」とお礼の挨拶を述べた。

大変に賑々しく、盛大な歓迎セレモニーを催していただき、桃園市側のチャーター便就航への期待を感じた。日本から台湾への渡航者数は、台湾からの渡航者数に比べて極端に少ないが、互いの交流をより活発化し、日本からの渡航者も増えていくことが、今後国際定期便の安定的な就航に繋がる。隣国の中でも最も親日的な台湾、その中でも巨大な国際空港をもつ桃園市との関係を今後も深く保っていくことで、国際観光都市神戸としての取り組みを確固たるものにしていきたい。（文責：平井）

(2) 源鮮農場 (15:00)

台湾は山が多い地形の島で野菜や米の耕作面積は限られていることから、従来より食料自給率に課題がある。また少子化の傾向による農業従事者の減少や、気候変動の面から、農業の持続可能性についても課題があり、最先端技術を活用したスマート農業の導入が推進されている。

源鮮農場はアジア最大と言われている屋内垂直栽培を行っているスマート農園。2 階分の高さを天井まで棚を積み上げて野菜の栽培を行なっている。その様子を見学できる通路が設けられており、レクチャーを受けながら見学させていただいた。

最初に源鮮グループの蔡文清董事長が事業概要を紹介する動画を視聴。自身が自然食によって病気を克服したことをきっかけに、エレクトロニクス関連の事業から無農薬野菜の栽培に転換。人工太陽とナノ気泡の技術により水中の菌を抑える技術確立したということである。健康と、環境の持続可能性を考えることが理念として強調された。源鮮農場では温度、湿度、風速などをコントロールしている様を見ることができる。日照は人口太陽光により再現され、品種により異なった光に調整している。またナノレベルの細かな気泡により水中に酸素を供給している。肥料は豆乳を発酵させたものを農園内で生産して使用しており、害虫を殺す効果があるという。

こうした技術の活用によりグループ全体で野菜の種類は 100 種以上、1 日 1200kg を生産、ここでは 30 種類を生産している。後日に利用した台北市内の地下鉄駅構内でも「メトロ・フレッシュ」の名称で行なっているレタスの水耕栽培を目にした。収穫した野菜は同じ駅構内の飲食店でサラダとして消費しているため、輸送コストと環境負荷を削減できている。日本でも台湾と同じく、都市型の農業による地産地消が環境問題や安定した食料自給に貢献するものとして評価されており、屋内での垂直栽培の事例は増えている。しかし栽培コストがかかるために販売価格が高くなるというデメリットにより、大規模な営農は伸びないようだ。源鮮農場は徹底して「無農薬栽培による安全性」「オーガニック食品の健康への効果」を謳い、高付加価値化に注力している。日本では多くの消費者は農作物は安くて安全で当たり前という感覚で、生産者に安全と安定供給の全てを委ねている。昨今の米不足、価格高騰騒動もそのことが一因ではないかと思う。源鮮農場の成功は消費者に正しく商品の持つ高い価値を認めさせてきたことにあると感じた。(文責：平井)

(3) 威天宮 (17:00)

午後 5 時過ぎに、2014 年に建造された、三国志で名を為す関羽聖君を祀る壮麗な宗教施設である桃園威天宮を視察しました。

周建銘桃園威天宮總幹事、黃文進主任委員を始めとする多くの関係者にお迎えいただき、坊議長が代表して御礼のご挨拶を述べさせていただきました。

参道から、本堂・鐘楼・鼓楼・拝殿へと続く伝統的な中国式宮殿建築の威天宮は、精密な彫刻や色鮮やかな彩色が施され、屋根の龍や鳳凰、壁面の歴史画もすべて故事に

基づいたものであります。

関羽聖君一色の参道から正殿に入ると、巨大な関羽聖君像と共に、前面に一行に並んだ小さな関羽像が私達を迎えてくれます。

内殿では、まず「関刀」が飾られています。関羽聖帝君の「青龍偃月刀」は、山西省運城にある関公家廟に於いて200年以上に亘り祀られてきた歴史ある聖なる刀で、靈氣に満ちているとのことでもあります。

この「関刀」を撫でると財と力を得ると言われており、私達もこぞって「関刀」に触れさせていただきました。

そして、次には「漢寿平侯印」に触れさせていただきました。同じく山西運城の関公家廟にて、清明節の正統な祭祀

の場にて鑄造された格式の高い聖印で、この聖印に触れる事で、「真の福・真の貴・天地の平安」がもたらされると信じられているそうです。

「魏・呉・蜀」の三国志には、劉備、関羽、張飛の3人が、酒杯を手に義兄弟の契りを結び、生死を共にと誓い合う「桃園の誓い」や、貧しくとも高潔な劉備の人柄に惚れ込んだ一騎当千の豪傑である関羽と張飛の二人が劉備玄德を守り、すさまじい働きをする様子が書かれています。

特に赤壁の戦いは圧巻で、私も何度も読み返し、その余韻に浸ったものであります。

しかし、何故に劉備元徳や天才軍師諸葛孔明ではなく、関羽が神として祀られているのかが、大いに気になりました。



至るようであります。

関羽が本格的に祀られるのは宋の時代からの事です。

中国の歴史上最弱と言われた宋の皇帝が国家を守って貰う為に、関羽に「忠恵公」等々の王としての称号を与え、南宋の高宗が「壯繆義勇王」の名を与え神として扱われたということです。宋の時代は同じく神としての称号を持つ諸葛亮が関羽よりも格上であったが、元の時代になると、関羽の地位がより高くなり、現代に

関羽は忠義と勇武を象徴する歴史的人物として中国語圏では広く尊崇されており、また、威天宮は歴史的価値だけではなく、地域に根ざした信仰の場として活用されています。2022年の火災により焼失した後も多くの寄付により再建されたことから、熱心な信者に支えられているのだと実感しました。

庭にも様々なオブジェが配置され、金銀満載の車を趙子龍が引き、劉備・曹操・有孔明が同乗している「三國満載而歸」や、関羽像の下を潜り抜けると財が得られる「武



財神開公金銀道」等々、遊び心を十分に満喫でき、文化観光資源としても魅力的であり、今後の観光振興の柱としての活用が期待されます。

さらなる観光インフラの整備や地域との連携が望まれるところです。

神戸市においても、長田区が横山光輝氏の漫画「三国志」を活用した地域振興策を展開し、壁画や部将像を商店街に設置し、文化



資源を活かしたまちづくりにより、地域の活性化に取り組んでいます。

桃園威天宮との交流により、相互誘客に繋がるのではないだろうか！（文責：植中）

（４）桃園市政府観光旅遊局・観光産業業者との夕食懇親会（１８：３０）

午後６時半から桃園福容大飯店にて夕食懇親会が開催され、王麗媚桃園市政府観光旅遊局代理局長から歓迎のご挨拶を受けました。

許彦輝政府体育局局長、呉治平旅館商業同業組合理事、温錦儀桃園観光工場促進発展協会理事長、施玉仙民宿発展協会理事長、劉美忻旅行商業同業組合理事長、陳定漢桃園メトロ副総経理や観光旅遊局企画・国際科の方々、スターラックス航空の方々と、神戸市会・周尾神戸市観光局常務理事・神戸市観光局観光部の方々等々で夕食を共にしながら、観光施策や都市間交流の可能性についての意見交換・懇親会をさせていただきました。

神戸市を代表して、坊やすなが神戸市会議長から、「ランタン祭等で3回目の桃園市訪問であるが、今回は神戸空港からの初めての直行便での訪台であります。台湾がより近くなりました。両市の絆が益々深まることを期待しています。」と、謝辞を述べられました。

桃園国際空港と台北市中心部を結ぶ桃園メトロは、訪台する観光客には欠かせない公共交通機関であります。

案内表示の多言語対応、荷物持参者への配慮、バリアフリー設備の整備等、外国人観光客を見据えた実践的な都市交通の在り方は、国際化が進む神戸空港にとって大いに参考にさせていただきたいところです。

昨年、台湾から日本へは 604 万人が訪れていますが、日本から台湾へは 130 万人



しか訪れていません。そして、一番好きな国は日本と答えた台湾国民は 76%であり、次に好きな国・韓国は僅か4%であるとのことでした。

人口 2400 万人の国民の 4 人に 1 人が日本を訪れて下さっていることに感謝です。是非、修学旅行でも、直行便で台湾を訪れて欲しいものであります。

通販で買ったポケトークが思いの他役に立ち、何秀美桃園観光工場促進発展協会総幹事から、台湾の美味しいお土産についての情報を得ることが出来ました。言葉が通じると、より親近感が増すことを実感いたしました。

同席の陳定漢桃園メトロ副総経理が、「柔」や「大阪しぐれ」を3番まで覚えておられ、一緒に唱和させていただきました。

帰国してからも、「楽しい時間を共有できたことに感謝している。」と、ラインにメッセージがありました。

さらに、「桃園メトロと神戸市地下鉄の友好協定締結の実現を望んでいる。この提案が両市の交通発展に繋がると確信しているので、是非ご協力をお願いしたい。」と、結ばれてありました。

今後、神戸市としては、空港アクセスと地域観光を一体的に捉える都市設計の視点に加え、文化資源の再評価と他都



市との連携を通じたブランド戦略の構築を進めていく必要があります。

今回の視察では、都市機能の高度化と地域文化の活用という両輪の推進の重要性を再認識する機会となりました。

今後の政策立案に活かしてまいります。(文責：植中)

2、台北市訪問（19日）

（1）One & Co 視察（10：00）

2022 年夏に JR 東日本台湾事業開発が台北の中心地に位置し中山駅から徒歩 4 分という利便性が非常に高いところに設立した「One&co」を視察した。

日本でも、コワーキングスペースは多様化し、かなり進化を遂げ、魅力的な施設が増えてきている中、非常に本視察を楽しみにしていた。

JR 東日本がアジア市場への日本企業の進出支援を目的として、2019 年 8 月にシンガポールでコワーキングスペース「One&co」を開設し台北は 2 号拠点となる。



今回、「One&co」をご案内頂いた富田啓一朗氏をご紹介します。



富田啓一朗 TOMITA Keiichiro (Nick name: **ICHIRO**)
 1964.10.15生(東京オリンピック開催中)出身地:東京都
 趣味:ゴルフ、軽登山、スキューバ・ダイビング、B級グルメ、パレエ鑑賞
 台湾永久居留証 宅地建物取引士 台北旭日ロータリークラブ創立会長
 元JETRO中小企業海外進出コーディネーター 致理科技大学臨時講師
 インサイトアカデミー (<https://insighta.jp/set/1046?fcid=36>)講師

学習院大学 経済学部 卒業

1989-2005 台北
 2005-2009 上海
 2009-2011 東京
 2011-2012 イスタンブール
 2012-2015 モスクワ
 2015-2016 東京
 2016- 台北

1987-2005 スターツコーポレーション
 2005-2006 ファンドクリエーション
 2006-2015 スターツコーポレーション
 2015-2016 長谷川ホールディングス
 2016- bankan.東京優待サービス有限公司(自営)
 2022- 可創意股份有限公司 總經理
 (株式会社CO&CO 台湾現地法人)



在台20年以上!
 玉山2回登頂!

台北旭日ロータリークラブ
 創立会長



CO & CO

One&Co
 Co-working Space by JH-CAS



日本の鉄道会社は人口減少による鉄道利用者の減少に直面し、従来の運輸事業だけでは持続的な成長が困難であり、非運輸部門の収益拡大により運輸収入の減少を補完するため
 多くの鉄道会社がコワーキング事業を含む多角的戦略を進めており、JR 東

日本は鉄道事業に依存しない収益構造の確立を目指し、早期のうちに、非鉄道事業の収益比率を50%に引き上げていきたいとの説明があった。

JR 東日本は台湾では、lumine や atre といった商業施設を展開し、現地のライフスタイル向上に寄与しつつ、海外でのビジネスモデルを確立し、長期的かつ持続可能な収益基盤を図っている。

次に施設概要の説明をする。

One&co は、コワーキングという機能に、コラーニング、コネクションを加えた3つの機能とサービスを通じ、利用者間の有機的なコミュニティー形成を促す今流行りの施設である。



ビジネスマッチングとコミュニティー形成として、日本企業の台湾進出支援や台湾企業の日本進出サポートを行い、スタートアップ企業と大手企業のマッチング機会を提供している。オフィスビルの一階入り口から非常に洗練されたデザイン性の高い空間だ。

上層階は高級分譲マンションでもあるため玄関からセキュリティは万全であった。



[コミュニティコンダクター常駐]

日本人マネージャーや台湾人スタッフがコミュニティコンダクターとして、お客様のビジネスを繋ぎ、ネットワーク構築やコミュニティへの参加を後押しする。



[コミュニティパートナー紹介]

海外ビジネスで出会い様々なビジネス課題を One&co の専門パートナーによって、早期解決に導く。税務、法務、PR、資金調達など幅広いプロフェッションとのパートナーシップが、利用者の課題を解決する。

[コミュニティイベント開催]

毎週開催される各種イベントやセミナーにより、同じ目的や課題を持ったビジネスパーソンを繋ぐ。



日本と台湾、人と技術、新たな繋がりが生まれ広がります。コンダクターがサポート役となり、利用者間のコミュニケーションを促進、ビジネスマッチングイベントや、ホテルメトロポリタンプレミア台北、Breeze atre など、JR 東日本グループとの共同イベント開催を通じ、現地消費者との接点を設け、企業間、企業と消費者間の交流を活性化します。

視察の最中もスペース広場でイベント開催中でありました。2025 年 4 月 18 日に神戸空港国際チャーター便が運行開始となり、One&co taipei は単なるコワーキングスペースに留まらず、日台連携共創のプラットフォームとして非常に期待をるところである。

人種や国籍、宗教、性別、立場などあらゆる違いを、インクルージョンし、刺激的な発見や予想外のコラボレーションもうまれるであろう。

神戸空港の国際化により、国際線の利便性を活かし、海外研究機構、企業との交流、連携を一層推進し、神戸市だけではなく関西全体の経済発展に寄与する可能性がある。

神戸市を中心に、台湾企業が神戸進出、日本進出する際の相談、支援体制をさらに構築する必要が急務であると考える。

神戸空港の国際線化は、国際競争力を高める起爆剤になり得るこの最大のチャンスを活かし、両国の発展を期待するとともに、台湾との連携強化で、神戸市が取り組める施策を提案してまいりたい。(文責：高橋)

(2) 台北市立動物園 (13:00)

1. 視察概要



令和7年4月19日、台湾・台北市に所在する台北市立動物園を訪問し、園内施設の管理状況、展示動物の飼育環境、ならびに環境教育の取り組みについて現地で見学を行った。同園は台湾最大規模の動物園であり、ジャイアントパンダをはじめとする国際的に注目される動物展示に加え、台湾固有種の保護・普及にも力を入れている点が印象的であった。また、台北市立動物園は展示だけでなく、東南アジア動物園・水族館協会（SEAZA）やヨーロッパ動物園協会（EAZA）との連携を通じて、マレーバクやセンザンコウ、マレーシア虎などの希少種の繁殖・遺伝子多様性保全に国際的に取り組んでおり、日本を含む各国の動物園との間で協定や動物交換も活発に行っている。近年では、日本の高知県立のいち動物公園や、複数の国内動物園と協力関係を結び、飼育技術の交流や教育連携も進めている。こうした国際協力の姿勢は、台湾という島嶼国家における生物多様性保全の最前線の現場として、極めて先進的かつ示唆に富むものであった。視察を通じて、動物園が単なるレクリエーション施設ではなく、自然保護・国際交流のハブとして果たすべき役割を再確認する機会となった。（文責：高橋）

2. 台北市立動物園の概要

台北市立動物園は、1914年、日本統治時代の台湾総督府により台北市円山地区に開設された。これは当時、「円山動物園」として台湾初の近代動物園であり、動物展示と教育の場として広く市民に親しまれていた。戦後、動物園は中華民国政府の管轄となり、1986年に現在の文山区・木柵地区へ移転。以来、台湾最大の動物園として再整備され、現在に至っている。敷地面積は約165ヘクタールに及び、約400種・2,000頭以上の動物を飼育。年間来園者数は300万人を超え、台湾国内外から多くの来訪者を集めている。園内には「台湾動物区」「アジア熱帯雨林区」「アフリカ動物区」「夜行性動物館」「昆虫館」「爬虫類・両生類館」「児童動物園」など、テーマごとのエリアが整備されており、動物福祉・生態系の再現・教育普及の三点を兼ね備えた構成となっている。

3. 台湾固有種の展示と教育的意義

台北市立動物園では、「台湾動物区」を中心に、台湾にしか生息しない固有種が数多く展示・飼育されていた。なかでも台湾の象徴的存在とされる「タイワンツキノワグマ（台湾

黒熊)」をはじめ、台湾唯一の野生霊長類「タイワンザル（台湾獼猴）」、復元が進む「タイワンシカ（台湾梅花鹿）」などが印象的であった。さらに、「タイワンイノシシ」、「台湾長鬃山羊（台湾サロー）」、「石虎（タイワンヤマネコ）」、「台湾穿山甲」など、絶滅危惧種や保護対象種も多数展示されており、それぞれについて詳細な説明パネルが設置され、教育的観点が重視されていた。昆虫館や両生類・爬虫類館では、台湾特有の蝶類や爬虫類も紹介されており、地域固有の生物多様性を市民に伝える工夫が随所に施されていた。

4. ジャイアントパンダと「中国のパンダ外交」に対する考察



台北市立動物園におけるジャイアントパンダの展示は、国際的にも特異な事例である。通常、中国はパンダを他国に貸与する際、有償のレンタル契約を結び、繁殖した個体も中国に返還するという方針をとっている。しかし台湾においては、2008年に中国政府がパンダ2頭（团团・圆圆）を「贈与」という形式で提供し、台北市立動物園がそれを受け入れた。この「パンダ譲渡」は、当時の馬英九政権による親中姿勢の象徴的出来事と位置づけられている。馬政権は、中国との「和解ムード」を国内政治的に演出する中でこの譲渡を受け入れたが、その背景には明確な政治的意図があった。すなわち、「パンダを贈ることによって中国が台湾を自国の一部と主張する」、いわゆるパンダ外交の一環であり、単なる友好の証ではなかった。中国側は、譲渡に伴って「台中友好」や「两岸関係の改善」といった政治的演出を期待していたとされるが、民進党へ政権交代後はそのような演出は一切行われておらず、パンダは台湾国内において着実に飼育され続けている。これは、パンダを一方的な政治利用から遠ざけ、あくまで生物としての価値に基づき、自然保護・教育目的に真摯に取り込もうとする実務的な姿勢があらわれていると評価できる。また、パンダの展示施設そのものも非常に工夫されており、建物はらせん状に設計され、混雑時であってもスムーズに観覧動線が保たれ、観覧者がパンダの飼育状況を上方や側面からもじっくり観察できるよう演出されている。空間は清潔で開放的であり、過度な装飾や政治的演出は排除されている。施設内に中国国旗や台中友好の演出などは一切見られず、あくまでも「パンダという種」に特化した生物学的・教育的展示に徹している。その姿勢は、教育機関・学術機関の動物園としての中立性と教育性を担保し、国際的にも非常に誠実な対応として評価できるものである。

5. 動物を通じた日台友好交流の提案

神戸市においても、かつて王子動物園でパンダを飼育していた経験があるが、一方で「新たなパンダはいらない」とする見解も存在する。私自身も、中国の外交カードとして利用される中国からのレンタルによるパンダは不要であるという立場である。将来的にパンダが再び外交的な意味合いを帯びる可能性を考慮すれば、中国ではなく台湾からパンダを借り受けるという選択肢は、政治的にも文化的にも意義深い対応である。また、台北市立動物園との間で、動物交換（トレード）や教育協定を締結し、台湾固有種を神戸市内の動物園で展示する一方、兵庫県の象徴種であるコウノトリや日本在来の鳥類・魚類などを台湾側に贈呈することは、対等かつ互恵的な交流のモデルとなりうる。さらに、神戸市がかつて王子動物園で蓄積したパンダ飼育に関する知見や研究成果を、台北市立動物園と共有し、将来的にパンダという種の生物学的理解をより深めるための共同研究・情報交流の場を設けることも望ましい。飼育環境、行動観察、繁殖、栄養管理といった領域における知見は、両市の動物福祉向上にも寄与するものであり、科学的な連携を通じて一層の信頼構築にもつながる。動物は国境を超えて人々の感性に訴える象徴的存在であり、このような文化交流・学術協力を通じて、日台の友好関係を自然な形で育むことが期待される。

6. 結論と提言

台北市立動物園の視察を通じて、動物園が自然保護、教育、そして国際交流の拠点として機能している現場を確認した。神戸市としても、次の取り組みを提案する。

1. 台北市立動物園との友好協定の検討
2. 台湾固有種に関する特別展示や啓発活動の実施
3. 台湾産パンダの受け入れの可能性についての事前準備
4. 神戸市からの象徴的動物の贈呈を通じた対等な交流の実現

中国による一方的な「パンダ外交」に対して、地域間レベルでの草の根的な交流によって信頼を築いていくことは、今後の日本と台湾との関係において、現実的かつ意義ある選択肢である。神戸市がこのような役割を果たすことを強く期待したい。（文責：上畠）

（3）猫空ロープウェイ（15：00）

猫空ロープウェイは、全長 4.03 キロあり、麓の台北市立「動物園駅」から「猫空駅」までを結んでいる。途中、「指南南駅」があり、乗降可能。キャビン数 130 台、うち床全面が透明になっているクリスタルキャビンが 34 台あり、通常料金プラス 50 台湾ドル必要である。

山上の猫空地区は、台湾茶の名産地であり猫空駅周辺の眼下には茶畑が広がっており、「猫空駅」周辺は多くの観光客で賑わっており、地域経済の活性化に寄与しているものと見受けられた。

また、日本の三重県御在所ロープウェイと静岡県日本平ロープウェイと、認知度向上と相互誘客を目的に、友好協定を締結しており、中国語の猫空ロープウェイパンフレットを提示すれば、御在所ロープウェイでは 30%の往復乗車料金の割引、日本平ロープウェイでは 20%の割引で利用でき、駅構内のモニター広告でもそれぞれの日本の風景が紹介されていた。

復路はクリスタルキャビンに乗車したが、ガラスの清掃が必要と感じた。また駅員さんにロープウェイのパンフレットについて伺ったところ、親切にも乗客が列をなしているにも関わらず、チケット事務所から出てきて私達をその場所まで案内していただいた。台湾の方の温かく親切なご対応に感心した。

神戸も今後、現在の布引ハーブ園ロープウェイから摩耶山にかけて新設ロープウェイを計画とのことであるので、神戸の海と山を感じていただけるゴンドラ設計とスタッフの応対、また観光誘客のため国内外問わず他都市との提携を模索し、国際交流と都市ブランドを向上させる取り組みが必要であると感じたところである。(文責：しらくに)



3, 新北市訪問（20日）

（1）淡海 LRT(09:40)

紅樹林駅から淡水漁人碼頭駅まで乗車。淡海 LRT は、紅樹林駅から新興住宅地である淡海新区を結ぶ路線であり、地域の都市開発と並行して整備された先進的な交通インフラである。視察時には、LRT 敷設の背景や開業後に周辺地価が上昇し、人口が増加した状況について、車内で説明を受けた。交通利便性の向上が地域の居住環境や投資価値の向上につながっている点は、都市開発と交通施策が密接に連動する好例である。

とりわけ注目すべきは、LRT の各駅および車内において、地元出身の有名作家が描いた絵本のキャラクターを活用したストーリー性のある演出がなされている点である。これは子どもや家族連れを惹きつけ、地域への親しみを育む仕掛けであると同時に、LRT そのものを観光資源とする発想でもある。このような工夫は、現在経営的に苦戦が続いている神戸市営地下鉄海岸線の活性化においても応用が可能であり、沿線地域の文化資源や物語性を活かしたデザイン展開の検討も有効であると考ええる。

また、淡海 LRT は既存市街地では用地確保の困難さのために高架部分はあるものの、新興住宅地を含むそれ以外の部分においては地上走行による景観との調和、環境負荷の低減、低騒音といった LRT 本来の特性を最大限に活かしており、神戸市における今後の導入検討に際しても参考とすべき要素が多い。車両デザインも窓を大きくとり沿線景観を楽しむことができるなど、高い完成度を誇っていた。

以上の通り、淡海 LRT の事例は、LRT の整備を単なる移動手段の提供にとどめず、都市全体の魅力と価値を高める装置として活用する好事例である。神戸市が今後進めるべき交通インフラの在り方を考える上で、極めて示唆に富む視察であった。（文責：村上）



(2) 淡水漁人碼頭(10:10)

新北市に位置する淡水漁人碼頭（フィッシャーマンズワーフ）を視察し、神戸市におけるウォーターフロント開発および地域活性化の施策を検討する上で参考になる点が多々あった。

本施設は、かつての漁港機能を一部保持しつつ、観光・商業・文化施設として再整備された複合型のウォーターフロントエリアである。淡水河の河口に広がる風光明媚な立地を活かし、スケジュールの都合上見ることはできなかったが夕陽の名所としても知られていることから、国内外から多くの観光客を惹きつけている。

敷地内には広場機能を有する約 3,000 人規模のイベントスペースがあり、地元行政や民間事業者が連携して定期的に音楽イベントやマーケットを開催しているとのことだった。これにより、昼夜を問わず集客力を維持し、エリア全体の回遊性を高める設計となっている。

また、観光船ターミナルや遊歩道といった水辺空間を活用した施設整備が進められており、滞在型・体験型観光の導入によって、単なる通過型観光地からの脱却を実現している。飲食店舗や物販施設についても、地元の特色を反映した構成がなされており、地域経済に寄与している点も注目に値する。

神戸市においても、ウォーターフロント再整備が進む中で、とりわけ景観資源や港湾機能を活かした空間活用、ナイトタイムエコノミーの創出、そして民間との協働の確立が課題である。淡水漁人碼頭的事例は、水辺空間を活かした魅力的な都市観光拠点の創出、持続可能なイベント運営、地域資源との融合といった多面的な要素を備えており、神戸市の今後のウォーターフロント施策にとってきわめて有効な参考となるものである。

(文責：高橋)



(3) 淡水フィッシャーマンズワーフ～八里渡船頭 (11:00)

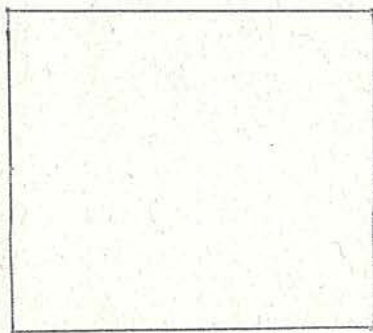
淡水河口部に形成された港湾エリアは、漁業・交易・交通の複合拠点として発展してきた歴史を持つ。フィッシャーマンズワーフから八里への水上移動は、港湾と周辺集落の関係性を観察するうえで有用であった。

現地のボランティアガイドの方が日本語で説明を行ってくれた。その説明によれば、この地域には離島由来の先住民族が早期から定住し、河口域の豊富な資源を利用した漁労・交易ネットワークを形成していた、とのこと。

港湾の発展は行政主導ではなく、住民の生活圏の延長として始まった経緯があり、その後に橋梁整備（淡水大橋など）や船舶航路の整理が加わり、現在の都市インフラ体系が構築されている。

港湾景観および橋梁インフラについては、海と河口を活かした都市形成、港町の再開発における観光依存度の高さ、交通結節点としての水上ルートの活用など、神戸でも参考となる要素が複数見られる。特に、水上交通を都市交通網に組み込むことで陸上混雑の緩和を図る仕組み、先住文化の歴史資源化と地域アイデンティティ形成は、神戸西部のウォーターフロント再編における示唆となる。また、災害時の代替輸送手段としても有効である。

（文責：浅井）



(4) 十三行博物館 (11:30)

十三行博物館を視察。この博物館は、淡水河下流域の十三行遺跡に基づき、先住民族の生活文化と交易史を記録・展示する公立施設である。考古学的資料の保存・公開に加え、土器製作や発掘模擬作業などの体験プログラムを備え、歴史文化の市民参加型学習拠点として機能している。

施設は大規模ではないが、多様で低価格に設定されている体験型コンテンツにより、児童・家族層を含む幅広い市民が利用可能。展示は、生活技術・交易圏形成・集落構造など都市形成前史に関わる要素を整理して提示しており、文化資源を地域アイデンティティ構築の基盤とする手法が明確である。館長による座学のほか、主な展示の視察、体験型学習にも取り組ませていただいた。

神戸における応用可能性としては、垂水区までを含む港湾部の歴史文化資源（移民史、貿易史、海事産業遺産等）を活用し、ワークショップ（模型づくり、交易体験、発掘模擬など）等を通じ市民が体験的に学べる拠点を整備することで、港町としての固有性を次世代に継承しやすくする点が挙げられる。単なる展示施設ではなく、学習・体験・市民参加を核に据えることで、地域文化を「観光資源」ではなく「共有資産」として再定義できる。

（文責：浅井）



（５）板橋第一運動場（防災公園）（１４：１０）

●黄淑君（新北市議会議員）

新北市の人口は404万人であり、私の選挙区の板橋区には55万人が住んでいる。かなり広いので、防災公園管理は、区長、消防課、防災課が責任分担して行っている。この板橋第一運動場は多機能型施設で、災害時の避難場所であるのだが、普段は市民が利用する運動公園になっており、様々なイベントも開催している。公園内ではデジタル地図情報やバリアフリー設備が整備されている。1万人観覧席がありVIP800席が用意されている。40年の歴史がある運動場である。



5月中旬から2週間にわたってマスターズゲームをこの場所で行う事になっている。担当から説明させる。

●謝秀瑜科長

マスターズゲームスの説明。4年に1回のイベントでかなり規模の大きいイベントである。各年齢層に関係なく、30歳以上が参加できる健康的な国際的な総合イベントである。国関係なくすべて個人参加である。ただし、チームワークが必要な場合もあり、国関係なく様々な国から同競技者が集まり参加する。主な開催場所はこれまで、欧米やオーストラリアが中心だったが、2021年関西実施予定だったものがコロナの関係で2027年に延期になった。台湾で行うのがアジアで最初になった。2月17日に締切りになったが参加者数が25000人超となった。これまで台湾で行われる

一番参加人数の多い国際イベントとなる。4つのテーマがあり、「観光」「SDGs」「情報」「親睦」である。5月17日台北ドームで開幕式、30日新北市美術館でフィナーレになり、期間中35種類の競技が行われる。陸上、アーチェリーがこの場所で行われる。5つの都市で懇親会などの晩餐会が開かれる。SDGsが大きなテーマで、可能な限りリサイクル可能なもので作る。メダルストラップやメダルなど。交通などは、全ての外国人に方に14日間のフリーバス交通カードを提供する。エバー、チャイナエアと提携しており、航空費用10%オフで利用できる。CO2削減の工夫として、空港間ホテル間の移動はシャトルバスを運行しており、Uberと提携してオフィシャルの60本の観光スポットを紹介案内する。



●その後、賴清徳総統が視察に来た時と同じ様に設置したブースに案内される。
この避難場所の管理責任者は陳奇正 板橋区長であり、途中で挨拶があった。
・防災避難レクチャーを設置されたブースごとに実施
まず避難者は受付を行う。そこでは個人情報登録とここでの注意事項、生活ルールなどのマニュアルと個人プレート受け渡しが行われる。ボランティアも同じように受付を行う。登録は紙とデジタルの両方を選択できるようになっている。デジタルソフトは新北市が開発したものを利用する。その後、受付では名簿を作成し避難者の把握を行う。物資もここで把握し、在庫を管理している。ボランティアと避難者の数が表示されている。1630人収容、80%物資は用意されている。

次の場所では、生活用品の配布場所になり物資の支給を受ける。基本的な個人セットに加え、乳幼児用の粉ミルクやおむつも配布される。物資はスマート避難所システムで QR コードで管理処理されている。物資は契約メーカーから供給され、近隣都市からも不足分はやり取りして調整補充される。



食料提供場所ではボランティアがルール説明。衛生面、食事時間管理、片付けなどは職員が行う。ボランティアも同じ場所で食事提供される。

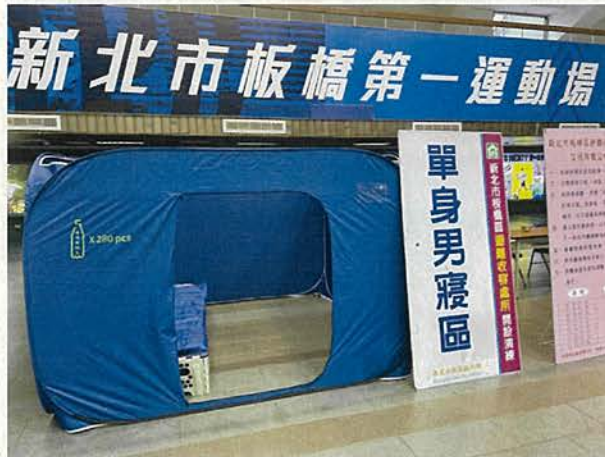
生活場所は、独身男女、ファミリーで別れており、独身男性と女性の間にはファミリー生活エリアで必ずセパレートするようにしている。パトロールもボランティアが行っている。室内には仕切りがあるが、外ではテント形式になる。なお、ボランティアも全く同じ場所で寝泊まりできる。



新北市の防災広報啓発のブースも用意されていた。ボランティアの皆様が対応。

住民には「家庭逃生計画（家庭避難計画）」の作成が推奨されている。また防災マップを作成して渡している。自宅から最寄りの緊急避難場所などを記載している防災アプリをインストールしてもらうようにもしている。板橋区だけでも81ヶ所避難場所があり、この防災公園では1600人収容可能である。

子ども用の防災の取り組みを絵本などで案内している。安全意識などを子どもの頃より啓発している。また、小さな子どもが避難してきた場合、絵本で落ち着かせることも意味している。



【質疑応答】

Q. 住本質問：災害時は下水の破損が予想される訳だがその時の、避難場所でのトイレの対応を教えて欲しい。

A. 陳区長：29の区があり、移動式トイレを装備している。緊急用に全区に配備しており、避難者数に応じて臨機応変に移動させて対応している。避難用トイレは各避難場所には常設している。

Q. 植中議員質問：水圧が低くペーパーなど流せない状況について衛生面の災害時の対応は。

A. 陳区長：新北市はトイレは流せるようになっている。今はペーパーの材質も良くなっており、下水処理も発達して流せるようになっているので問題ない。

Q. 上畠議員質問：有事の防空壕などの避難対応について。

A. 陳区長：4、5階建のマンションは建築基準法で地下2階まで設置しなければならない。それを防空壕として利用することになっている。それよりも大事なのが市民防災意識の啓発である。例として、24階高層ビルがあり火事が発生したことがあった。それを鎮火させたのが2人の高校生であった。それだけ防災コミュニティが大事だという1つの例である。神戸は震災30年。台湾も地震が多い国でありお互い同じ意識であると思う。中央政府が対応しなければならない問題だが、区長としても普段から「備えあれば憂いなし」ということを心がけて区を運営している。昨年、2回大きな台風が板橋区に上陸して約900本が倒木した。とても板橋区だけでは対応できず、近隣の区にも応援に来てもらって対応した。災害時には横の連携も必要であり普段より関係性を構築している。

(文責：住本)

（６）新北放送局板橋放送所（１７：３０）

新北市文化局 黄芳瑤科長

この板橋放送所は新北市指定文化財となっており、日本統治時代の著名な建築技師、栗山俊一氏によって 1930 年 12 月に設計建築されたものである（栗山俊一氏は 1910 年東京帝国大学建築学科を卒業して大正初期に台湾に渡り台湾総督府営繕課に勤務して井出薫氏の副手を務めた）。当時はこの板橋放送局を中心にして、台湾南部の方に向けてラジオ放送をしていた。この建物はかなり日本建築の要素が取り入れられている。

※板橋放送局は日本統治時代に台湾で建てられた五大放送施設の一つであり、台北放送局からの無線放送電波を高雄まで中継・増幅して送信することで、全台湾をカバーする放送網の構築に重要な役割を果たした。建築物の特徴としては、台湾の高温多湿な気候に対応するため設計された屋根の排熱・通風路や、壁に使用された中空煉瓦があげられる。これらの中空煉瓦は「栗山式防暑中空煉瓦（栗山式防暑ブロック）」と呼ばれグリーン建築の先駆けとしても高く評価されている。

この施設は年中無休で一般開放されており、「全国名所旧跡日」や「新北読書フェスティバル」など多彩な文化・芸術イベントが開催されている。現在は「財団法人新北市当代伝奇文化芸術基金会」が 15 年間の委託契約を締結されており、その劇団が在中して若手芸術家育成の場所となっている。ここを拠点にして国際的な「京劇」が展開されている。板橋放送局の敷地面積は 1.7 ヘクタールでそのうち屋外エリアが 1.53 ヘクタールを占めている。園内には 4 棟の主要建物があり、古跡本体の 1 階部分は 5G 没入型シアターや文創ショップなどの体験・商業空間として活用されており、2 階は行政機能を担うエリアとして使用されている。この古跡建物は「太鼓舞踏劇場」によって運営されている。その他の建物は工場 B と車庫があり、工場 B は親子向けに科学と芸術を融合させた展演館として、車庫は「板橋ストリートハウス」として常設展示が行われている。

ストリートハウスでは、板橋放送所の歴史や文化の軌跡、栗山俊一技師の建築作品、そして放送局に関わる文物が展示されている。2023 年は合計 164 回のイベントが開催され、11,604 人が参加。翌年は 202 回のイベントが開催され、特に 7 月から 9 月にかけて開催された「Clap 伝奇サマーアートフェスティバル」では、50 回の公演、2 回の展覧会、10 回の文学講座が行われ、参加者数は延べ 16,225 人になった。

財団法人は人間国宝王氏の設立によるものであり、西洋的なものも取り入れて「京劇」という形で表現している。一番有名なものは「欲望」というもので東京でも公演している。この場所では、お芝居で使用する小物などを展示している。ダンス教室が隣の教室で行われており、文学館も併設している。ここを中心にアートパフォーマンスの拠点として作っていきたいと考えており、周辺住民にとっても気軽に訪れる憩いの場となるようにしていきたい。北京にいるイメージで京劇を見てもらいたいと今回は用意した。

※実際、女優が着付けと化粧を舞台上で実施しているパフォーマンスを観覧する。

古典美を追求する演目「楊貴妃」。



市指定文化財の活用法として、文化芸術の発信振興拠点として活用している良い例であると感じた。特に台湾の伝統文化を保護する財団と、この文化財を保護する行政の目的が合致したことで、相乗効果を生み年間の来場者が年々増加している。この日本人の建築家の建物を残すことは台湾の親日性を後世まで引き継ぐことの意味表示であるとも感じ、ぜひ日本人の観光客にも訪問してもらいたい。また、かなり訪問の予定時間が遅れたのにも関わらず、行政の担当スタッフや俳優の女性の方々がスタンバイして待っていてくれたのには感服した。今回はあまり時間がなく、この古跡棟しか視察できなかったが次回は是非他の3棟も視察したいと思う。(文責：住本)



4. 新北市議会表敬訪問 (21日10:00)

新北市議会副議長 陳鴻源氏を表敬訪問し、陳副議長より以下のご挨拶をいただく

・私は、皆さんがここを見学する中で、溢れるような熱意と人情味を感じ取っていただけると信じている。このような基盤の上に、私たちが経済面でも文化面でも互いに協力し合い、しっかりと結びつき、双方がますます発展していけることを願っています。ご来訪ありがとうございました。

神戸市議会 坊恭寿議長より陳副議長へ以下の挨拶を行う

・本日はお忙しい中、貴重なお時間をいただき誠にありがとうございます。先日は、黄淑君新北市議会議員をはじめとする、訪問団の皆様、に、神戸市会へお越しいただきました。私は、当日、別の公務があったため、お会いすることが叶わなかったのですが、本日こうして皆様とお会いできたこと、心から嬉しく思っております。新北市には、台湾ならではの豊かな文化、独特の自然景観、さらには大都会らしい繁華と、さまざまな魅力が集まっていると伺っており、新北市の魅力を見て、感じて、神戸市に持ち帰りたいと考えております。また、このたび、台湾桃園国際空港と神戸空港間で新路線が就航しました。これが架け橋となり、新北市と神戸市、ひいては台湾と日本の観光やビジネス交流をより一層促進できるものになると強く信じております。神戸市会といたしましても、両都市の観光・ビジネス振興につながる取り組みを支援してまいりたいとかがえております。最後に、本日ご出席の皆様方のご健勝及び一層のご活躍を心から祈念いたします。

今回の新北市訪問にあたりスケジュール調整などを行っていただいた、新北市議会 黄淑君議員より以下のご挨拶をいただく

・私が今回、神戸市議会へ視察に訪れると決めた際、新北市の若手企業家の皆様にも同行いただくことになり、候市長や蔣議長からも大きなご支持とご評価をいただきました。昨日の全体の視察においては、新北市政府もこの訪問を非常に重視し、各局の公務員を含めておよそ100名を動員して視察に協力しました。また、視察では阪神・淡路大震災から30年という節目であることを特に取り上げさせていただきました。昨年、新北市、ひいては台湾でも0403地震が発生し、私たちも民間住宅や被災住宅に関する業務に非常に注力してきました。このような防災関連業務の推進について、将来的に日本、特に神戸市と協力することができれば、私たちの国と国との社会的なつながりはさらに堅固なものになると、私は信じております。今回の交流活動を通じて、地方企業間の交流が促進されたのはもちろんのこと、政府と議会間の関係においても、お互いの信頼感が一層深まったことを大変ありがたく思っております。先ほど、陳鴻源副議長が話されたように、台湾人は日本に対して特別な熱意と親しみを持っています。昨日の視察中も、坊議長をはじめ、神戸市議会の皆様から「台湾に何かあれば、それは日本にとっても大切なことだ」というお話を何度もいただきました。私たち台湾人もまた、日本に何かあれば、それは台湾にとっても大切なことだと信じています。このような堅固な友情関係は、本日さらに一歩深化すると確信

しております。

最後に、神戸市会の坊議長をはじめ、全ての議員の皆様が新北市にお越しいただいたことに、改めて心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

記念品交換を行ったのち、新北市概要をまとめた動画を視聴。以下、新北市概要

新北市（しんほくし、英語: New Taipei City）は、台湾北部に位置する中華民国の直轄市で、2010年12月25日に台北県から昇格しました。台北市を取り囲むように広がっており、首都圏の一部として都市機能と自然環境が共存する地域です。

・地理と行政区分

新北市は台湾本島の最北端に位置し、東は基隆市、南東は宜蘭県、西は桃園市と接しています。市内には台湾本島の最北端である石門区の富貴角や、最東端の貢寮区の三貂角などがあります。全市は29の行政区に分かれており、行政中心は板橋区にあります。

・人口と社会構成

新北市の人口は約404万人で、台湾で最も人口の多い都市です。労働人口の60%以上が大学・専門学校・大学院を卒業しており、高い教育水準を誇ります。また、新住民（外国からの移住者）やその子女も多く、多様な文化が共存する社会となっています。

・交通と経済

新北市は台北市と密接に連携した交通網を持ち、MRT（地下鉄）や高速道路が整備されています。市内には30万社を超える企業や工場が存在し、台湾随一の企業経済規模を誇ります。また、持続可能な発展を目指し、国際的なスマートシティアワードを受賞するなど、先進的な都市計画が進められています。

・文化と観光

新北市は自然と歴史が融合した観光地が豊富です。九份や十分などの山間の古い街並み、陽明山や烏来の温泉地、淡水の歴史的建造物などが人気です。また、鶯歌陶瓷博物館や十三行博物館など、文化施設も充実しています。

・市の象徴

- ・市の花：椿（ツバキ）
- ・市の木：台湾山桜
- ・市の鳥：鷺（サギ）

新北市議会議場見学

- ・動画視聴後、新北市議会議場見学を行う。以下、新北市議会概要

名称：新北市議會

英語表記：New Taipei City Council

設立年：2010年（旧・台北県議会より改編）

※2010年、台北県が「新北市」として直轄市に昇格したことに伴い、現在の議会体制に再

編

議会構成

- ・定数 66 名（2022 年選出時点）
- ・任期 4 年（直近の議員選挙は 2022 年、次回は 2026 年）
- ・選挙区：13 選挙区
- ・選出方式：中選挙区制（区ごとに複数議員を選出）

主な役職

- ・議長 蔣根煌（2022 年就任、国民党）
- ・副議長 陳鴻源（国民党）

党派構成(2022 年選出時点)

- ・中国国民党 32 名
- ・民主進歩党 28 名
- ・無党団結連盟 3 名
- ・無党派 2 名
- ・台湾民衆党 1 名

男性議員 38 名、女性議員 28 名（男女比率 58%：42%）

議会組織と委員会

- ・程序委員会：大会議事日程及び議案の審査
- ・第一審査委員会：民政局、社会局、労働局など
- ・第二審査委員会：財政局、地政局、環境保護局など
- ・第三審査委員会：工務局、水利局、都市開発局など
- ・第四審査委員会：交通局、農業局、経済発展局など
- ・第五審査委員会：教育局、文化局、新聞局など
- ・第六審査委員会：警察局、消防局、衛生局など
- ・法規審査委員会：市法規等事項の審査
- ・紀律委員会：大会移動懲戒案件の審査

議会理念

第 4 回議会にあたる今期は、「多元的・コミュニケーション・国際化」という理念を掲げ、過去を継承しながら前進し、市民が地方自治と議会民主政治の真の意味を理解できるよう促進。民主政治の継続を前提に、民意に基づき、新しい時代の風貌を創造し、市民に奉仕し、政府を監視し、地方建設に向けて積極的に発信する新北市議会の精神を展開する。

（文責：外海）



第二部 台湾訪問議員団団員所見

1、平井真千子団長

今回は、我々の訪台の前に新北市議員と新北市の若手企業家による訪問団が神戸に視察に訪れていただいたところから交流がスタートした。4月18日、神戸空港からの初の桃園便と一緒に搭乗し、滞在中には黄議員が案内下さったおかげで、限られた時間であったが多くの視察を行うことができた。

新北市は404万人、桃園市は229万人という人口を抱える大都市で、今回出会った政治家も起業家も皆若く、そのエネルギー感には感化されるものがあった。

日本では台北以外の台湾北部の都市についてはあまり知られていないが、観光やビジネスの交流を深めることは神戸にとって確かなメリットを生むことに繋がる。また交流を通じて「形の上だけでなく信頼感が深まった」という言葉が何度も聞かれ、国と国とでお互い助けあい、安全を強固にする関係がまた積み上がったと感じる訪台であった。

2、しらくに高太郎議員

訪台し各所で歓迎を受けながら感じたことは、友好とは相互の信頼関係によってもたらされるものなので、神戸にお越しいただくようお願いすることはもちろん、むしろこちらから神戸空港を通じて訪問することの意義を深く考えさせられた。

特に、訪問した「One&Co」の富田啓一郎氏から台湾の歴史をはじめ親日的な背景と現状を伺う中で、民主主義は勝ち取ったものである、との考察は、極めて説得力があり、自由と民主主義を普遍的価値であることを自治体や民間人で共有し交流することは、最も大切な平和の礎を築くことになることを改めて気付かされたものである。

一方、観光交流の面では、桃園メトロと神戸観光局との連携は始まってはいるが、役員さんとの懇談で、やはり空港からの交通アクセスの中でお互いの広告宣伝をすることの効果は大きい、との話題になった。そこで神戸空港のアクセスの一つは神戸新交通であるので、今回訪問した桃園市や新北市などと提携し、デジタルサイネージなどの表示をはじめとする視覚的また他の五感に訴えられるような提案をして参りたいと感じた。長年の悲願であった実質的な「神戸空港の国際化」が実現した初日に、訪台出来たことに深い感慨とこれまで携わられた先人の方々と関係者の皆様に、敬意の念に堪えません。そして、とりわけ新北市の黄議員には、市内視察をはじめ献身的なご対応をいただいたことに心より感謝の念を表し、所見といたします。

3、植中雅子議員

長年の念願であった神戸空港の国際化がやっと実現し、2025年4月18日に日台友好神戸市会議員連盟の一員として、スターラックス航空台北行きの第1便に搭乗する機会を得た。

去る4月16日には、新北&基隆市議や不動産・建築業等々の皆さんがご参加の、21名の日本神戸友好交流訪問団と交流し、帰国される18日には、第1便での同乗となり、訪問団の皆さんから、「国際線就航で神戸がより身近になり交流の機会が増える」と、大歓迎の意が伝えられた。

初めての神戸空港国際線利用で気になる幾つかの課題がある。

① 駐車場から第2ターミナルに至る通路に雨除けの上屋の設置が望ましい。

② バス移動の待機室で。

- ・スペースの問題もあるが、土産物販売場が手狭で買いにくく、品数が限られており、ボリューム・バラエティーの充実により神戸産品売り上げ増へのさらなる工夫を望みたい。
- ・カフェテリア等、飲料販売も必要。(自販機でも可)
- ・バックで入ってくるバスの排気ガス対策。

③神戸発台北便は約3時間弱で桃園空港に到着したが、帰りは閑空着であったので、かなりの長時間を要した。改めて、直行便の有難さを実感し、チャーター便ではあるものの、帰国便対応も必要と感じた。

台北到着後すぐに訪れた源鮮スマートファームでは、ビルの中で、ナノ気泡の水、それぞれの野菜に合わせたLEDの光、独自の有機肥料で約100種類の野菜を1日12000kg生産・出荷されている様を見学し、これなら、大都会でも野菜等の栽培が出来ると大いに参考になった。費用対効果がどうか？

桃園市政府観光旅遊局等々の方々との夕食懇親会では、王副局長から歓迎のご挨拶を受け、坊議長からも「直行便の実現により、台湾がより近くなった。両市の絆の深まりを期待したい」と、謝辞があった。

一番好きな国が日本と答えた台湾国民は76%、次に好きな国・韓国はなんと4%との事。そして、国民の4人に1人が日本を訪れて下さっていることに驚きと共に、感謝です。神戸の魅力発信を強化し、是非、度々訪れていただきたいものです。

19日の猫空ロープウェイは、全長4.03km、片道23分長距離試乗。140台のゴンドラが稼働し、多くのエネルギッシュな観光客で賑わっていた。この国のこのエネルギーの源は、どこにあるのだろうか？そして、この長距離ロープウェイは、六甲山にも欲しいと率直に思う。

21日には、人口400万人の大都市・新北市議会を表敬訪問し、66名の議員の

机上に議長との直接電話が設置されたり、私物が置きっぱなし状態であったりと、日本の議場との違いに驚いた。

この度、連日にわたりお世話をいただいた黄淑君新北市議に心から感謝をし、神戸市と新北市との姉妹都市提携を視野に入れ、両市のさらなる交流の発展を望むものです。この直行便がチャーター便を経て定期便となり、短時間で行ける海外旅行や視察、経

済交流や議会間交流、学生の修学旅行に利用され、親日国家台湾との様々な情報交換、相互協力の構築が為されることを願うものである。

4、上畠寛弘議員

令和7年4月、長年の懸案であった神戸空港の国際化がついに実現し、離発着ともに第一便として台湾・桃園国際空港線が開通したことを受けて実施されたものである。この「神戸空港国際化第一便」による台湾訪問という歴史的機会を捉え、単なる交流にとどまらず、外交・教育・農業・観光・環境・動物福祉等の多角的分野にわたり、実務的かつ戦略的な意義を持つ視察とした。これまで神戸市は、日中間で初めて「友好都市」協定を締結した都市であり、また王子動物園では中国からパンダを受け入れてきた経緯もある。そのため、対外的には「親中」的な都市という印象が一部で定着していた。しかし、今回神戸空港の国際線第一便として台湾線が選ばれたことにより、神戸市が中国一辺倒ではなく、台湾との関係をも大切にす都市であるという新たな姿勢を台湾国内に明確に発信する契機となったと確信している。

神戸空港の国際化において、就航が実現したのは台湾・韓国・中国の三か国である。その中で台湾が離発着ともに第一便であったことは極めて意義深い。また、久元市長は当初韓国訪問を予定していたが、渡航を取りやめ、市長と議長という二元代表制の長のうち、議長である坊恭寿市会議員のみが台湾を一か国目に訪問したという点も象徴的である。さらにこの訪問時、坊議長は地方自治法に法定される全国6団体のひとつ「全国市議会議長会」の会長という立場にもあった。国交のない台湾に対して、日本の地方自治体の代表者が公式に訪問し、信頼を深めたという点で、象徴的かつ政治的意義は大変大きい。神戸空港からの第一便が台湾最大の国際玄関口である桃園国際空港に着陸した初日、台湾側では桃園市政府による正式な歓迎式典が挙行された。式典には市政府関係者、空港当局、観光・経済関係者、メディアなど多数が出席し、台湾側における本路線の戦略的期待が如実に示された。このような大規模な歓迎は、通常の定期便開通時には見られないものであり、台湾が神戸を重要な国際都市として認識し、今後の多層的な協力関係を築く意思を強く有していることを物語るものであった。この背景には、日中間には国交がある一方で、日本と台湾の関係は実務レベルにとどまるという外交上の制約がある。しかしその中においても、地方自治体同士が人と人、都市と都市の信頼を築くことは、日本と台湾の信頼関係を深化させる上で欠かせない基盤であり、その意味で本件の政治的・象徴的意義は極めて大きいと評価される。

19日には、台湾・台北市に所在する台北市立動物園を訪問し、園内施設の管理状況、展示動物の飼育環境、ならびに環境教育の取り組みについて現地で見学を行った。同園は日本統治時代の1914年に創設され、現在では台湾最大規模の動物園として世界的にも知られている。ジャイアントパンダをはじめとする国際的に注目される動物展示に加え、台湾特有の動植物を広く展示・保護し、その普及に力を入れている点が印象的であった。特にタイ

ワンリス、タイワンツキノワグマ、タイワンザル、タイワンイノシシ、タイワンキジ、ホンセイインコ、タイワンヒグラシなど台湾固有種の展示が豊富で、来園者に対して台湾独自の生態系への理解を促す構成となっている。同園では2008年に中国から譲渡された2頭のジャイアントパンダ（团团・圆圆）が現在も飼育されており、これは中国が通常の「レンタル方式」ではなく「贈与」という形式をとった世界的にも特異な事例である。当時の馬英九政権が中国との和解ムードを国内政治的に演出する中で受け入れたものであり、政治的意図が色濃く反映された、いわゆる「パンダ外交」の一環として位置づけられている。中国側は譲渡に伴って「台中友好」や「兩岸関係の改善」といった政治的演出を期待していたとされるが、民進党政権への移行後はそのような演出は一切行われず、パンダはあくまでも台湾国内で地域住民に親しまれながら教育・環境保全目的で着実に飼育されている。パンダ舎はらせん状の設計となっており、混雑時においてもパンダの飼育状況が観察できる空間が演出されている点においても、教育的配慮に優れた設計思想が垣間見られる。また、中国的意匠や政治的メッセージ性は一切排除されており、種としてのパンダの生態を純粋に展示するという理念に貫かれていた。台北市立動物園は、シンガポールやオーストラリアなど複数国との間で国際的な動物交換・研究・保全連携を進めており、日本の動物園との連携も今後さらに深化させる余地がある。神戸市においても、かつて王子動物園でパンダを飼育してきた経験があり、神戸市が有する飼育技術・研究知見を活かして、パンダを含む希少動物の生物学的研究において、台北市との間で情報共有を進めることは極めて意義深い取り組みである。さらに、台湾側から固有種の譲渡を受けて神戸市内の動物園で展示する一方、神戸市側からは王子動物園で繁殖した動物の子を贈呈したり、日本在来の希少鳥類や水生生物などを台湾側に贈ることで、対等かつ双方向的な動物交流を実現したいと考えている。動物は国境を超えて人々の感性に訴える象徴的存在であり、このような文化・教育・環境の交流を通じて、自然な形で日台の信頼関係を育むことができる。今回の訪問においては、新北市議会の議員との交流も行われた。新北市は台湾最大の都市圏を構成し、台北市に次ぐ人口と経済規模を持つ中枢都市であり、神戸市にとっても交流相手として極めて重要な位置づけにある。私自身これまで幾度も新北市議会の議員と交流を重ねてきたが、今回の訪問を契機として、新北市議会との間での友好協定の締結を視野に入れた関係強化を一層推進すべきである。なお、新北市議会においては現在、議長をはじめ国民党が多数派を占めており、台湾政府においては民進党政権という「ねじれ構造」が存在しているが、今回アテンドを務めてくださった新北市議会議員が民進党所属であったことは、こうした政治的配慮のバランスにおいて極めて重要な意義を持つ。今後は民進党議員との実務的パイプを活用し、政権との信頼関係を損なうことなく、新北市議会との友好交流協定を視野に親交を進めていくことが肝要である。

今後の展望としては、神戸空港と桃園国際空港との間で友好エアポート協定を締結し、観光情報の相互発信や災害時の協力体制構築、両空港間のPR協力などを検討するほか、台北の猫空ロープウェイと六甲・摩耶山のロープウェイ施設との連携による都市型山岳観光

の相互学習・情報共有、さらには青年交流・教育旅行・姉妹校締結の促進などが考えられる。また、大都市における農業の持続可能性という観点からも、台湾で進むスマート農業やAI農業の先進的取り組みは、農地の少ない神戸市においても非常に参考になる分野であり、今後の技術連携・情報交換を行うべき分野である。本年12月には、神戸市内に法人本部を置く甲南学園に設置される甲南高等学校がスタディツアーで台湾を訪問する予定である。芦屋市に立地する同校ではあるが、甲南学園という枠組みを通じて近隣自治体との連携や神戸市との関係性も深く、また同学園が設置する甲南大学は神戸市東灘区に所在することから、民間私学における青年交流・学校交流のモデルとして大いに発展する可能性を秘めている。こうした交流の芽を丁寧に育み、将来的な姉妹校提携や文化・語学・研究にわたる継続的な連携へと発展させていくことを、引き続き提案していきたい。このような実務的協力を着実に積み重ねていくことで、「自由と民主主義のアジアに開かれた神戸」「中国一辺倒ではない神戸」という新たな都市像を国際社会に打ち出していくことが可能である。台北市動物園や新北市議会との交流にとどまらず、教育・空港・農業など様々な分野において、神戸市と台湾がパートナーとして対等に手を携え、互恵的な関係を構築すべく資して参りたい。

5. 浅井美佳議員

今回の台湾視察は、神戸空港国際化に伴う第一便での渡航という象徴的な機会であり、都市間交流の新たな段階を示す節目となった。出発前には日本国内で台湾の若手実業家との意見交換を行い、地域産業の担い手が抱える課題や国際展開に向けた視座を整理したうえでの訪問であったことが、現地での学びをより具体的に結びつける要因となった。

現地での歓迎は極めて手厚く、行政・民間双方から神戸との関係構築に対する強い期待が示された。毎日何度も意見交換が行われたことから台湾の実情も深く知ることができ、こうした都市同士のネットワークが経済交流や文化交流を超え、地域間の信頼基盤を強化するのだなと再確認することができた。

一方で、台湾をとりまく内外の政治的緊張は、決して「対岸の火事」ではないことを現場で強く認識した。特に淡水フィッシャーマンズワープでは、台湾の端に位置していることから国防の話もあった。また、経済活動や港湾機能、都市間連携は国際情勢の影響を受けやすく、神戸としてもアジアの港湾都市間ネットワークにおける安全保障のリスクや外交的配慮を抜きにした国際交流は今後成り立たないことを痛感した。

全体として、今回の視察は単なる交流事業にとどまらず、神戸が国際都市として今後どのような立ち位置を取るべきか、港湾都市間での協調や連携の在り方を考える契機となった。私としては今回の経験を日々の活動に活かしていく所存である。

6、高橋としえ議員

2006年の神戸空港開港から19年、約5000万人を運んできた神戸空港がいよいよ世界とつながる記念すべき日の2025年4月18日。神戸空港発台北行きの初便に搭乗する機会を得られました。

当日は晴れやかな天気恵まれスターラックス航空JX835便の搭乗手続きを済ませた。完成した第二ターミナルは屋上に展望デッキのある二階建て、ガラス窓からは燦々と光が差し込み神戸の明るい未来を象徴するかのように大変気持ちよくストレスフリーで出国手続きを済ませた。

数日前から神戸を来訪している新北、基隆市議会が中心の友好交流訪問団の方々と同便である。この度の視察は新北市黄淑君市議を中心にお世話になり、新北市と神戸市との姉妹都市連携等々を視野に入れ、神戸国際空港からの直行便を契機により一層両市の発展を目的としており数々視察させていただき意見交換もできた。

現在、神戸空港は週40便の国際チャーター便を運行しており地理的にも経済的にも近い台湾との交流は、観光、経済、教育の各分野での発展が期待される。

2030年前後を目処に国際定期便の就航を計画しており、更なる施設の充実と空港アクセスの向上や地域経済との連携強化を進め、神戸空港の国際的な競争力を高める取り組みの充実が課題である。

現在は運用時間制限があるが将来的な24時間運用が実現すれば、国際物流や夜間便にも対応できるハブへと発展することが期待される。

One&Co 視察報告書でも述べたが、まずは台湾と神戸の連携強化のために神戸市は台湾企業向け神戸サポート窓口の設置や進出のためのインセンティブ拡充の提供、また医療分野においても台湾語対応の医療通訳等具体的施策を提案したい。

今まで日本と台湾は災害時に互いに支援を行い深い信頼関係が構築されてきました。国際化に伴いさらにこの絆が強まることを期待し今回の台湾視察に大変ご尽力いただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

7、住本かずのり議員

今回は、神戸空港国際化に伴いスターラックス航空の台湾桃園便にて台湾行政視察に参加した。訪れた都市は、桃園市、台北市、新北市と三都市であったがどことも熱烈的な歓迎を受けた。桃園空港では神戸と桃園との直通便記念式典が行われ、坊議長からは神戸の都市の魅力を案内して観光・交流PRに努めた。この台湾との直通便は、単なるインバウンド観光誘致・学術・経済交流だけではなく、親日国である国々との交流を通じて、災害時の互助の信頼作りには大きく意味するものであると感じた。例えば、台湾では地震が多発する国同士として防災体制の構築や、避難・緊急物資のやり取りが空港を国際化することによって直接輸送のやり取りできる可能性が広がったことなどは大変重要な観点であると考えている。

今回は他には、台北市の長距離ロープウェイや動物園、新北市ウォーターフロント、LRT など、今後の神戸で計画中的の新たな都市政策に資する施設も視察する機会を得た。特に、新北市 LRT については駅を中心とした街づくりが急激に進行しておりコンパクトな街づくりが進行している。新北市は台湾で最も人口を要する（404万人）都市であり、将来を見据えた街づくりは本市にとっても参考になった。また、LRT の各駅には芸術の要素を取り入れ、地元アーティストの造形物を効果的に配置し、車内にも座席を潰してマスコットを座らせての遊び心を取り入れており、乗ることを目的にした車内作りの工夫が見て取れた。これは本市の地下鉄海岸線の誘客施策にも大いに参考になる点である。また、台北動物園のパンダ館には中国からレンタルされたパンダではなく、台湾所有の自前のパンダが生育・繁殖されており、多くの入場者が列をなしてまずはパンダを見学していた。パンダは子ども達だけではなく大人にも大人気で、何よりパンダの様々な関連グッズも種類が豊富でその売り上げが動物園内では一番多いのではないかと思えた。現時点では王子動物園のパンダはいないのだが、台湾台北と日本神戸との交流の中でパンダのレンタルや譲渡が可能になれば、中国に気を使わずにまた、高額なレンタル料を支払わずに済むのではないかと考える。

神戸市は台湾台北、台中に直通で行くことができることにより、益々の都市間交流が盛んになると考える。今回は神戸空港国際化に先立ち、台湾から新北市と基隆市の市議会議員団が神戸市議会を訪れ議場を見学し、その後も懇親会が開催された。議員間交流も一時的ではなく継続して行うことで、情報交換や交流が密になり相互関係を構築することで新たな協力関係が生まれると考える。引き続き交流を続けていきたいと感じた。

8、外海開三議員

人口約 404 万人に対し議員数が 66 人であり、議員 1 名あたりの人口は約 61,212 人と、我々神戸市と比べ少数の議員数で運営されていることを鑑みると、神戸市議会の定数削減は引き続いて取り組まねばならない重要案件であると感じた。

新北市議会では議員自席に私物を置きっぱなしにすることが認められており、また、各席に固定電話が設置され、発言許可を受けるために電話を用いて副議長へ連絡し許可を得るとのこと等、我々神戸市議会との制度の違いを認識した。

議場での全体撮影後には、今後の新北市と神戸市における議会間交流のさらなる促進や、両都市の観光、ビジネス振興についての取り組み支援を約束し、新北市議会を出発し帰路の途につきました。

9、村上立真議員

今回の台湾訪問に際しての各視察先における学びは各個レポートに記載されている通りであるが、全体を通して特に印象に残ったのは①神戸に対する相互交流の期待、②台湾自身の「東南アジア」への帰属意識、の2点である。

まず①についてであるが、日系企業である One&Co の富田総経理から日台相互のインバウンド・アウトバウンドの様相を伺った際に、昨年台湾から日本へ 600 万人を超える方々がお越しになったのに対して、日本から台湾へは 130 万人強であった、というご説明があった。これだけでも大きなギャップがあることが分かるが、分母となる人口が台湾は約 2400 万人、日本が約 1 億 2000 万人であることを考慮するとさらに相対的なギャップは広がる。このギャップを埋めるためにもこの度の神戸空港国際化に伴う台湾便の就航に寄せられる期待が大きいことを各所で感じた。そして何より、相互の人々の行き来が活発であるということ自体が「台湾有事は日本有事」という言葉の信頼性を強化し、中華人民共和国による台湾およびその先にある太平洋への力による現状変更の試みに抵抗する大きな力になる。すなわち神戸空港の国際化が単に神戸経済の活性化に留まらず、安定的な都市の経済成長の基本となる安定した平和的国际環境構築の一助となる。そのことを強烈に今回感じ取ることができた。

そして②の台湾自身の「東南アジア」への帰属意識であるが、これはまさに「台湾は東アジア」という理解が一般的であろう日本国内にいと得難い学びであった。各所で台湾の方々は「台湾は東南アジアである」という説明を前提に話をしていた。これは今後大きな成長が見込まれる東南アジアとの協力と交流を深めようとする神戸市にとっては、すでに台湾という強力なカウンターパートを得ていることを意味する。神戸の企業が成長著しい東南アジアへの進出を考える際に、神戸市との連携の環境が整っており、かつ東南アジアの最北の玄関口となる台湾を足掛かりに展開していくことも考えられる。

以上特に印象深かった 2 点について記述したが、その視察先全てにおいて大きな学びがある訪問であった。今後の議会活動に活かしたい。

(了)